

特別支援学校高等部における 生徒のキャリア形成支援を目的とした教員研修プログラムの開発

○今井 彩（明星大学通信制大学院 博士後期課程）

1 目的

特別支援学校学習指導要領総則（高等部）では、キャリア教育を推進する観点から、産業現場等における実習（以下「現場実習」という。）を取り入れるなど、就業体験機会を積極的に設けることや、自己の在り方生き方や進路について考察する学習を積極的に取り入れていくことを求めている。現場実習は、知的障害のある生徒が主体的に進路選択、進路決定をするために、自己の将来を見据え、多様な生き方に関する取捨選択を行いながら、自らのキャリアを形成していく重要な学習機会となっている。しかし、知的障害のある生徒のキャリア形成支援については、指導上の困り感を感じている教員が多い。今井・前原（2024）は、この解決に向け、特別支援学校の高等部教員による現場実習をととした指導実践についての調査結果をまとめ、教員が有効だと考える指導・支援方法について整理した「リフレクションガイド」を開発した¹⁾。このリフレクションガイドは、生徒のキャリア形成を支援するために、現場実習をより有用な教育活動にするための教員支援ツールであり、高等部教員の活用実践において、その有用性が確認されている²⁾。しかし、この有用性を実証していくためには、より多くの教員を対象とした量的な調査の実施が必要だと考えられた。そこで本研究では、知的障害のある生徒のキャリア形成支援における教員の指導力向上を目的として、リフレクションガイドを活用した研修プログラムを開発し、その有用性を量的に検証する。

2 方法

(1) 調査時期及び対象者

調査は202X年7月～12月に実施した。調査対象校は、所属長の許可を受けて研究協力を得ることができたA県の特別支援学校（知的障害）7校（分校1校含む）とした。調査対象者は、各校の高等部教員のうち、研修受講を希望した109名と、研修は受講せず、質問紙調査への協力に同意した62名の計171名とした。

(2) 調査方法

研修受講を希望した高等部教員に対し、202X年7月～8月の間に各校で研修を実施した。研修受講者は、研修の前後に質問紙調査に回答した。研修受講者の研修受講前後の指導の意識変容を比較できるように、研修後の質問紙調査は12月に実施した。また、研修による意識変容を確認する調査として、同時期（12月）に研修未受講者に対して質問

紙調査を実施した。

(3) 調査項目

質問紙調査の項目は、国立教育政策研究所生徒指導・進路指導研究センターが令和元年7月から10月に実施した学級・ホームルーム担任のキャリア教育に関する意識調査（高等学校学級・ホームルーム担任調査）問9「学級あるいは学年でキャリア教育を行う上での15項目に関する指導の程度」を一部改変して用いた。各項目への回答は「まったく指導していない」を1点、「あまり指導していない」を2点、「ある程度指導している」を3点、「よく指導している」を4点とし、もっとも当てはまるものを1つ選ぶよう回答を求めた。

(4) 研修プログラムの内容

研修は、リフレクションガイドに示された「①キャリア形成段階に応じた現場実習」、「②現場実習のフィードバックのプロセス」、「③実習先からの評価の活用」の3つの内容で構成した。

研修では、事前にリフレクションガイドとワークシートを配付し、各内容について、研究者による5分間の講義と、受講者による10分間のワークショップを実施した。ワークショップでは、学年や学級ごとに2～4人のグループをつくり、対象生徒を1名決め、リフレクションガイドに示す内容に沿って、対象生徒への指導・支援の方法について考えてもらった。最後に研修のまとめを行い、各グループから今後取り組みたいと考える指導・支援の概要について発表してもらい、各グループの意見を共有した。

(5) 分析方法

質問紙の分析は、オープンソースの統計ソフトウェア jamovi (Version 2.4.5) を用いて実施した (The jamovi project, 2021)。

(6) 研究倫理

質問紙調査においては無記名で個人情報を扱わないこと、未協力の場合や同意の撤回における不利益はないこと、ならびに研究の目的と内容を紙面上で説明し、調査協力の同意は質問紙への回答によって得ることとした。なお、本調査は明星大学研究倫理委員会の承認を得て実施した（承認番号2024012）。

3 結果

(1) 研修受講者の研修前後の比較

研修受講者109名のうち、研修前後両方で回答が得られ

たのは85名であった（回答率78％）。対応のある平均値の比較において順位尺度を扱うため、ウィルコクソンの符号順位検定を行った。この結果を表1に示す。結果は、研修前よりも研修後のほうがすべての項目において得点が高かった。有意差が見られたのは「①様々な立場や考えの相手に対して、その意見を聴き理解しようとする事」、「⑩学ぶことや働くことの意義について理解し、学校での学習と自分の将来をつなげて考えること」、「⑫自分の将来の目標の実現に向かって具体的に行動したり、その方法を工夫・改善したりすること」、「⑭『就職したい職場』『働く力をつけたい事業所』『進学したい学校』を選び、その実現のために努力すること」の4つの項目であり、いずれも $p < .05$ 、 $d > 0.3$ であった。

表1 研修受講前後の平均値の変化

質問項目	研修受講前		研修受講後		p 値
	平均	SD	平均	SD	
①様々な立場や考えの相手に対して、その意見を聴き理解しようとする事	3.13	0.48	3.27	0.52	.035*
②相手に理解してもらえるように、自分の考えや気持ちを整理して伝えたり、伝える努力をしたりすること	3.35	0.57	3.40	0.54	.511
③自分の果たすべき役割や分担を考え、周囲の人と力を合わせて行動しようとする事	3.42	0.52	3.53	0.50	.120
④自分の興味や関心、長所や短所などについて把握し、自分らしさを発揮すること	3.32	0.52	3.38	0.53	.476
⑤喜怒哀楽の感情や周囲の人に流されず、自分の行動を適切に律して取り組もうとする事	3.20	0.55	3.25	0.62	.499
⑥不得意なことや苦手なことでも、自分の成長のために工夫して取り組もうとしたり、他者に援助要請をしたりすること	3.27	0.63	3.39	0.60	.126
⑦調べたいことがあるとき、自ら進んで資料や情報を集め、必要な情報を取捨選択すること	2.93	0.61	2.98	0.56	.538
⑧起きた問題の原因、解決すべき課題はどこにあり、どう解決するかを工夫すること	3.01	0.63	3.08	0.74	.385
⑨活動や学習を進める際、適切な計画を立てて進めたり、評価や改善を加えて実行したりすること	2.89	0.62	2.93	0.61	.667
⑩学ぶことや働くことの意義について理解し、学校での学習と自分の将来をつなげて考えること	3.33	0.59	3.49	0.60	.043*
⑪自分の将来について具体的な目標を立て、現実を考えながらその実現のための方法を考えること	3.25	0.61	3.31	0.64	.497
⑫自分の将来の目標の実現に向かって具体的に行動したり、その方法を工夫・改善したりすること	3.09	0.59	3.25	0.55	.039*
⑬企業や福祉事業所、専門学校などに関する情報を収集・活用すること	2.66	0.73	2.82	0.71	.101
⑭「就職したい職場」「働く力をつけたい事業所」「進学したい学校」を選び、その実現のために努力すること	3.06	0.62	3.29	0.65	.008*
⑮「就職したい職場」「働く力をつけたい事業所」「進学したい学校」を選ぶにあたって、採用や受け入れの可能性、合格の可能性を考慮すること	2.79	0.73	2.92	0.69	.168

* = $p < .05$

(2) 研修受講者と研修未受講者の比較

研修受講者と研修未受講者の比較にはマン=ホイットニーのU検定を用いた。結果は、研修未受講者よりも研修受講者のほうが⑧⑨⑬を除いた項目で得点が高かった。有意差が見られたのは「⑩学ぶことや働くことの意義について理解し、学校での学習と自分の将来をつなげて考えること」、「⑭『就職したい職場』『働く力をつけたい事業所』『進学したい学校』を選び、その実現のために努力すること」の2つの項目であり、いずれも $p < .05$ であった。

表2 研修受講有無による平均値の違い

質問項目	研修受講群 (n=85)		研修未受講群 (n=62)		p 値
	平均	SD	平均	SD	
①様々な立場や考えの相手に対して、その意見を聴き理解しようとする事	3.27	0.52	3.21	0.45	.204
②相手に理解してもらえるように、自分の考えや気持ちを整理して伝えたり、伝える努力をしたりすること	3.40	0.54	3.31	0.53	.146
③自分の果たすべき役割や分担を考え、周囲の人と力を合わせて行動しようとする事	3.53	0.50	3.44	0.59	.210
④自分の興味や関心、長所や短所などについて把握し、自分らしさを発揮すること	3.38	0.53	3.31	0.56	.241
⑤喜怒哀楽の感情や周囲の人に流されず、自分の行動を適切に律して取り組もうとする事	3.25	0.62	3.10	0.59	.065
⑥不得意なことや苦手なことでも、自分の成長のために工夫して取り組もうとしたり、他者に援助要請をしたりすること	3.39	0.60	3.29	0.52	.113
⑦調べたいことがあるとき、自ら進んで資料や情報を集め、必要な情報を取捨選択すること	2.98	0.56	2.95	0.61	.449
⑧起きた問題の原因、解決すべき課題はどこにあり、どう解決するかを工夫すること	3.08	0.74	3.15	0.54	.576
⑨活動や学習を進める際、適切な計画を立てて進めたり、評価や改善を加えて実行したりすること	2.93	0.61	2.95	0.56	.600
⑩学ぶことや働くことの意義について理解し、学校での学習と自分の将来をつなげて考えること	3.49	0.60	3.21	0.63	.002*
⑪自分の将来について具体的な目標を立て、現実を考えながらその実現のための方法を考えること	3.31	0.64	3.19	0.62	.120
⑫自分の将来の目標の実現に向かって具体的に行動したり、その方法を工夫・改善したりすること	3.25	0.55	3.18	0.59	.248
⑬企業や福祉事業所、専門学校などに関する情報を収集・活用すること	2.82	0.71	2.65	0.73	.073
⑭「就職したい職場」「働く力をつけたい事業所」「進学したい学校」を選び、その実現のために努力すること	3.29	0.65	3.03	0.54	.003*
⑮「就職したい職場」「働く力をつけたい事業所」「進学したい学校」を選ぶにあたって、採用や受け入れの可能性、合格の可能性を考慮すること	2.92	0.69	2.92	0.55	.498

* = $p < .05$

4 考察

本研究における研修プログラムでは、研修を受講した教員の指導意識の変容を確認できた。これは、研修をとおして他の教員と共通理解を図ったことや、リフレクションガイドによって自分のこれまでの指導の意味や意義を再確認したことによって、各項目において教員が「指導している」と確信できた結果だと考えられる。有意差が見られた項目には、「学ぶことや働くことの意義」、「学校での学習と将来とのつながり」、「自己実現に向けた努力」について記載されている。このことから、現場実習を通して、生徒が自分の将来を見据え、自発的・自律的に行動していけるような指導への意識が高まったと考えられる。以上より、本研究で開発した研修プログラムは、生徒のキャリア形成を支援する教員の指導意識を高めるうえで、有用であることが示唆された。今後は、研修内容のさらなる改善や、教員の継続的な支援体制の構築が求められる。

【参考文献】

- 1) 今井彩・前原和明『特別支援学校の現場実習における教員の指導・支援に寄与するガイドラインの開発ーデルファイ法を用いた合意形成を通してー』,「Journal of Inclusive Education, 13」, (2024) , p. 22-34
- 2) 今井彩・前原和明『特別支援学校生徒のキャリア形成を支援する教員が指導力の向上を図っていくプロセスから検討するリフレクションガイドの有用性』,「キャリア発達支援研究 vol. 11」, (2025) , p. 88-98